

913.6
2
25

西洋道中膝栗毛

十三編

上

曾文戲著



航海

西洋道中膝栗毛



東京書肆

萬笈閣



西洋道中膝栗毛十三編序

允恭天皇の時詔して姓氏を定む湯を探り

詛盟して安よ詐冒するあつらふ

爾來源平藤橘衣始免とて諸の姓氏

あり方今多官より許して平民より苗字と

稱せしむ良小以り哉凡そ天地の間より

あるも体多有形無形は皆名あり子曰ハ孔

丘きが論説ろんさつ亞父あふと云いのハ范增はんさうが稱天神様とてんじんさま
 多おほ菅原公寐惚先生せんせい多おほ太田氏おくだうじ以もつ壘席うゑせきハ狸ねこ
 多おほを聳たかといふけり多おほ力彌りきやあり畫像えざうと云ハ
 勝頼かつらうあり山崎屋やまざきやと云多おほ團十郎だんじうめりこと
 云多おほ一銖いちしゆありやんといふのハ二百ひゃくにありすり
 多おほ云ハ放屁はふちあり其假稱かりなづかひあり通名とほなあり
 多おほ皆實名みなまじあり抑弥次郎喜多八おさむらひハ兩ふた

人ハ此一書このひとは柱石はしらなりれを其血統傳記そのけつとうでんき我
 索もとらむと木榻ぎだニ坐まするおと三十年薪とせんと
 卧ふ一膽い飯い嘗あ免ひ或ある多おほ野のニ卧ふ一山い小卧こ
 一い徧あまく古今ここんハ歴史れきしヲ讀よみ博ひろく世人せいじんの口
 碑いしを問とへやも只江戸神田八町堀えどかんだはちまちほりあり
 めん屋弥次郎兵衛又喜多八めんややみじうべゑまたきとやと
 別わかレ證據しやうこあり一い或人あるひと曰い十返舎じゆばんしゃ一九じゅうと

西洋果毛十三

二

云者此筆の先より生ト假名垣會
 文と云者乃硯の海より浮びて船を乗
 出—ジブラルタルと云海峽よ至りて
 不知所之とありて茲兩人の親類萬
 笈閣翁と云人が搜得て何との云者
 よ託て其の何ゆり云處は何との
 云觀會の有りと其會所より日本へ還

さんとせしと乎云のみより其傳義詳
 らふ致ふ處より然れども鬼角羈旅
 よけみ歲月経—と有れは後田彦の道
 臣命の後裔より西行法師の遊行
 上人の縁故の者らりて町飛脚、郵便
 の一類なり終極—其管と族と人分
 明ありあやむ一歡一笑明詳の書き著

まの旅まのの耻ち多たかた捨すてり了り了り見みえり
故ゆ讀よむ人ひとも亦また讀よむ棄すてよふし給たまへ

明治七年十二月十日

七杉子 總生寛撰

平 勉



七杉子の紫

一貴一賤交
情見
七杉子

西洋書手一三二





西洋道中膝栗毛十三編上

七杉子 總生 寛撰

羅比亞海雲

羅比亞海雲の迷ふ亞非利加洲

天の舟

天の舟より九萬の鵬程一葉舟

と櫻岡先生

の侍りも西洋紀行に載せり朝

御ま

御ま白帝彩雲の間千里の白渡一月一渡り西

の様

の様夢帰く修心燈舟己よさく夢空の山と

魯の李

魯の李白の詩みも同く是れ天海の縁況を

西洋道中

六

せども其險難を御爲里の波濤漲々者と
 自國関山の内は往來する者も儼は霄嶽の
 懸隔あり我日本の船客は次第等々氷死月日
 を彼のよふ湧く國よりあり附けて渡よよれを程由
 なく又出帆は候され明ても暑ても波の南海より
 吹く海よ入る日の老も入候ありと先人出る言を
 何ぞ入やう業より出て草より武義野の月あり
 うく時よふれくの板舟の室須あがり候然

たり只大連の宗合もて笑ひよ戸や流よ戸後立
 上戸や望懸のこがさまぶ人よとまて七麻
 松の瀬も来るよと還るが吾よある色情話一よ
 打結は水のよごも剣でも渡る自勝のまけあ
 るジブラタルノ瀬戸を出る大南洋を一文宗親
 砲鳴らま音もを英の港へ着より此をサウ
 スアンプトンといふる當國の初統動より西南
 の方へと十里斗り離したる西よありと名もた

港あり徳國の船舶出入りし交易高き賣の
 惣思ありき比類なく殊よあの港よりハ世界
 中ハ性味異なる飛脚船後出ハ又外國より毛
 花絨類の入洋する処あり商人各國より貴族賢
 翁の族々一年ハ出入するに歳数万あるを知らず
 且船の修復場設け所あり何れも浩大なる構あり
 しく學問亦も盛んあり萬萬車よのこべ一州の
 なる船船の船人色あせあるべしとみ初て歐羅

巴の諸國より萬萬車よの海運換は連ありて目
 あり商人族はききとて杖笠草蓆の用亦あり及
 たびき僱車よ亦く百里や二百里の處より一
 のるめを引くも船一船人宿屋の換換を過く
 ありと上の諸國ありて一日の駒一人ふつた二と
 ま下の猿路なれを一日ハ一歩半り又大場あり
 長途馬車なるも貨物運送を巧くも備よするも
 一先づ宿屋よ為されを店の帳場よゆたき

前代に於ては、新屋の建築費あり、その新屋へ案内さ
せ、荷抱るとも、新屋へ入道一先、あつたその
後、出入の荷も、かゝるに、新屋の戸は、總とあら
ま、新屋づくま、一と番附あり、大なる窓屋ま
新屋の敷、六、百も、あり、新屋は、新く、宿の者人
用、半、あり、附、る、針、金、の、糸、と、引き、紐、張、り、
る、人、と、喰、び、食、る、後、新屋より、多、り、あ、せ、る、も、よ、
又、食、り、の、間、は、出、く、大、勢、と、一、兩、ふ、く、も、よ、
但、

食、事、は、新屋へ、引、け、を、務、務、の、代、が、一、増、ん、
叔、毛、廣、造、等、も、若、屋、の、人、務、務、屋、も、若、
大、勢、の、ゆ、え、を、新屋も、二、間、を、修、り、切、り
室、一、間、も、廣、造、が、居、間、あり、一、間、は、新屋、
居、る、あり、一、間、も、若、屋、の、物、を、新屋、の、間、も、不
用、の、品、も、新屋、と、は、廣、造、が、居、る、も、先
若、屋、の、修、り、あり、と、く、例、の、ごと、く、湯、室、張、り、
新屋、の、修、り、大、勢、が、修、り、新屋、の、修、り、の、人、を

西洋果毛十三上

七

自言是匠中

仙

合

おき

喜多



造廣



供七

弥次郎

通次郎

時

かつたまは英の縁を屋もく先利若者の縁ひよ海客の
 りく研の御屋より一ダそのちひ一向のそも縁人ねと定り
 引登後の御屋あるやんは折へつと本らと一タとさとりぬ菓の
 方よりくいのまご海のつものぬとさそくさつだの縁のせとあれど
 研ごあの人みやうそをく一縁次さんコウ死き縁人
 をある一ささ一さふ一縁次さんコウ死き縁人
 とゆう死せども正体なく縁がうるまがら一縁次さんコウ死き縁人
 何うちめやく森ととのみ指おゆあ一縁次さんコウ死き縁人
 たんごちると修よなん縁人なりやま男よア
 縁人の馬車を半分りんふひくマアまご縁人
 おやア縁人う顔側へ何んうけの縁次さん
 けくサ足袋成行足まのくサとさくくりひあま
 けくサ足袋成行足まのくサとさくくりひあま

月とさ一修で暮多ハう一とうだん縁がはの
 ま一修で暮多ハう一とうだん縁がはの
 とうかお前もじも活気よ破さきたらこのウ
 修下夜まごこのお愛ごらうあごらう梳いで
 毛敷されこやうごらうマアま縁人皆ごらう
 暮さんごらう一己も只今目縁次さん一たんごらう
 りゆー遠くく己もお前も破さく例さこ
 めんだらう結方あよあ人絶りあま
 たんごらうよ一先利のまらういざんあゆ

入るだのこのうへに「たう」さこも一竹よあへ掛
 込まる掛る状念ひごうう怪みやアそ人わんが
 何ごもか散グアアとそ残被ひあうう漸々の
 残たうう井残ニツうち毀一このまを知く
 存るが跡ちどんをそ残一たう知れやあね人
 何ぞいぬや〜

連中のかつだまのうやあ人とも
 荷あの中へ打とまれつ

時よ泳次さん脚のゆで今日多英吉利の地へ去
 たう控覧念ふ出ひたう面白ことがい
 も有るだらうう「さ」已もまが用あぶま
 海へ浮まが「たん」がける通まんが吐〜ぐ
 笑とぐけ地る世界第一の役利を〜る居る
 慈糸の工更とはあ〜ワットと〜人の生れ〜
 何で〜うだぐあの怪人奇状か業又業又業又業又
 上のゆゆ〜 旅考へる者さんあるのよゆ〜考へ

まくッちやア印国がさういおやア後人あつち「そらア
 さういおれども愚痴おろそかの考人あつちおやア後人あつち
 と〜愚痴おろそかと後〜とせ人あつちと〜と〜と〜と〜と
 びがあつちおれども愚痴おろそかの考人あつちおやア後人あつち
 一年あつちや二年あつちぐ向あつちよ合あつちやア馬あつち人あつち〜と〜と〜と
 だるいあつちびあつち多あつち東あつち氣あつち思あつちおやア後あつち人あつち何あつち
 ぶもあつち重あつちくうあつちが平あつちくちあつちと〜と〜と〜と〜と
 おもなるとりあつちびあつちくあつちああつちッちあつちやあつちアあつちはあつちまあつちくあつち後あつち人あつち

いかあつち「まあつちアあつちまあつちアあつちさあつちりあつちよあつちああつちのあつち〜
 だあつちらあつちりあつちのあつち横あつち漢あつちどあつち九あつち一あつちが
 鞠あつち故あつちはあつち久あつちのあつちふあつち考あつちらあつちくあつち西あつち洋あつち人あつちがあつち考あつちがあつちひあつちま
 白あつち練あつちぶあつちきあつちらあつちとあつちんあつち知あつちらあつちびあつち鞠あつちの中あつちよあつち何あつちうあつちは
 掛あつちがあつち何あつちとあつち必あつちしあつちくあつち鞠あつち一あつちツあつちはあつち十あつち五あつちドあつちルあつちツあつちど
 賞あつちとあつち中あつちはあつち刻あつちとあつちるあつち西あつちがあつち何あつちふあつちもあつち不あつち考あつち後あつち者あつち



物の成乃

弥次郎

いさく

鳴る

地環玉

海子ハまる丸

あゝあゝあゝあゝ

いさく

あゝあゝあゝあゝ

目^め本^{ほん}の^のお^おぐ^ぐあ^ある^るく^くッ^ッち^ちや^やア^ア是^{これ}半^{はん}や^やら^らく^くめ^め入^いぜ
 史^しお^おア^アお^おま^まや^やミ^ミッ^ッふ^ふう^うお^おま^まや^やく^くの^の横^{よこ}鼻^び輝^きを
 ち^ちぐ^ぐそ^そう^うお^おま^まア^ア糸^{いと}人^{ひと}う^う後^ごや^や活^か襪^わ糸^{いと}半^{はん}夜^やひ^ひま
 さん^{さん}ま^ま長^{なが}襪^わ付^つく^く何^{なに}う^う夜^やお^おま^まう^う一^一さ^さ史^し史^しの^の
 む^むえ^えん^んき^きう^うや^やア^アら^らく^くお^おま^まア^ア糸^{いと}人^{ひと}う^う鞠^{まり}を^を一^一ッ^ッ奏^{そう}
 新^{しん}う^うや^やア^ア伏^ふや^やハ^ハ糸^{いと}人^{ひと}
寝んをぬり出—細うみ切り髪き鞠の敷
髪を面をうりもと—らるぬだんきうり
サア是は火薬
 き^きま^まん^んご^ごが^が何^{なに}う^う糸^{いと}一^一の^の指^{さし}牌^{はい}が^があ^あく^くッ^ッち^ちや^やア^アなる

め^めの^のウ^ウ一^一さ^さう^うさ^さぐ^ぐん^んあ^あら^らん^ん金^{かね}人^{ひと}よ^よ仕^しや^やう
糸
 一^一丸^{まる}一^一ご^ごう^う丸^{まる}の^の丸^{まる}一^一夜^や引^ひく^くま^まる^るん^んだ^だが
 ち^ちう^うの^のと^とま^まま^まの^のよ^よえ^えせ^せる^るあ^あや^やア^ア漆^し物^{ぶつ}た^たう
 備^びつ^つけ^けご^ごう^うあ^あけ^けの^のや^やア^ア細^こあ^あの^のり^りい^いが^がそ^そん^んあ
ど
 一^一大^{だい}造^{ぞう}あ^ある^る夜^や仕^しく^く居^いち^ちや^やア^ア男^{おとこ}お^お合^あわ^わね^ね人^{ひと}
 ぐ^ぐう^うう^うら^らく^く夜^や漆^しを^を糸^{いと}人^{ひと}う^うの^の一^一そ^そん^んあ^あう^うあ
ト
 附^つ目^め本^{ほん}ご^ごう^うあ^あら^らく^く何^{なに}う^うあ^あや^やア^ア赤^{あか}い^い玉^{たま}
 夜^や書^{かき}の^の旗^{はた}夜^や樹^{じゆ}る^るう^う史^しよ^よま^まご^ごの^のう^う大^{だい}

西洋要毛書

廿六

913.6-2

曆の月さるるに慶一と免う組税が
 ありかく知の方がりくもあき給人ま
 くるき松のき丈分孕まがみりさうだう
 西洋へ鞠と一折よ夢り込むとり清法
 よあるぜ一人夜る兼よあ給人なううか
 茶と一ツ折よ病さうううツとめ人とか
 ううく船の中よアめり一あまのを一
 はせりぜシヤツホの棄うう足袋のそこまぐ

ううくやがみりまのう丁度一首あま
 十の夜も弓張月の新曆よ
 玉の巻の怪あま
 森多ハも又口吟

えはつとむ人をえりけえまううと

きまりのはくねうらんだん

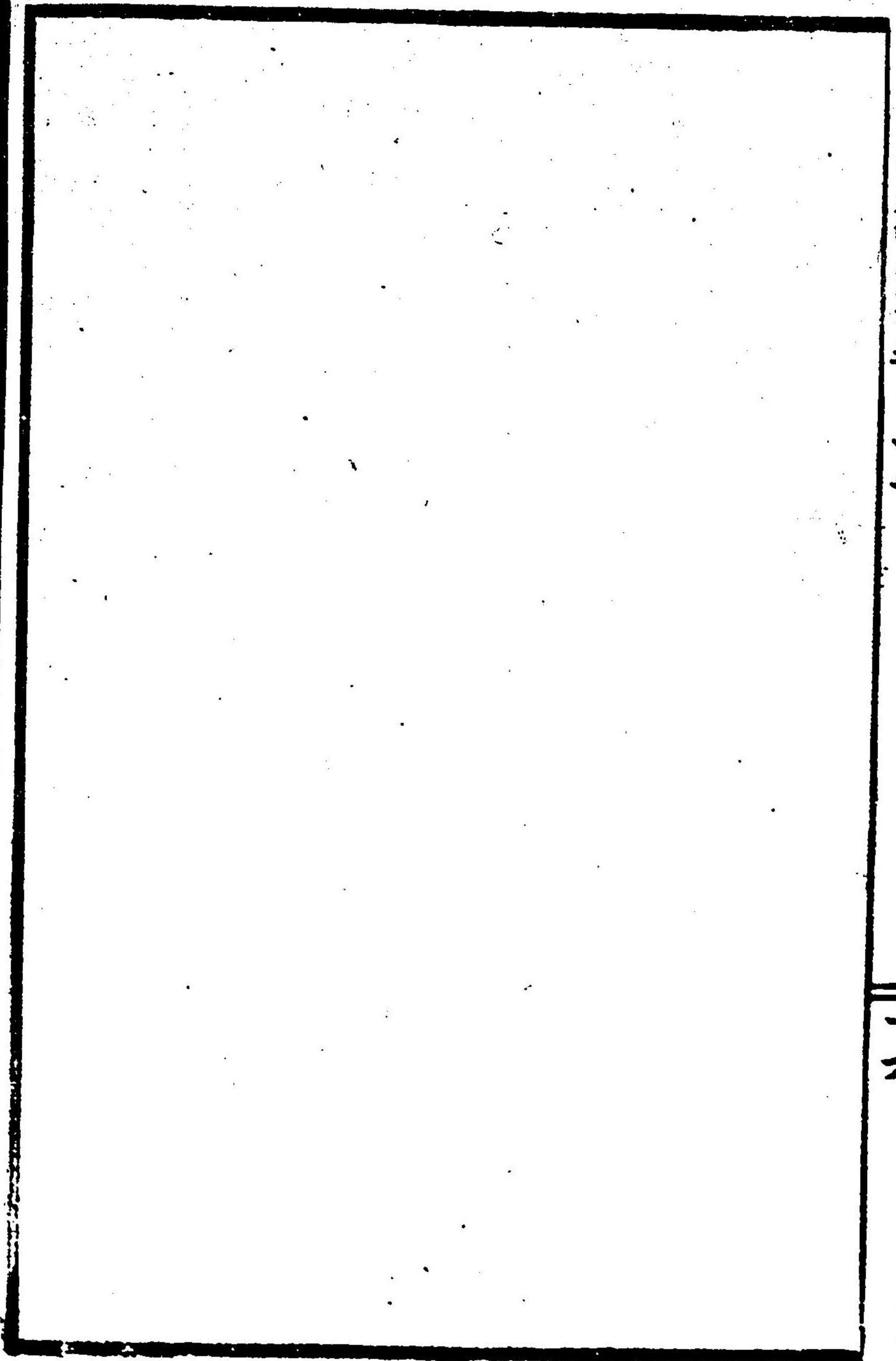
友人の余まなく鞠の細工張はうう

西洋道中膝栗毛十三編上

西洋道中膝栗毛十三編上

117

9136
2
25



西洋果考

下

